

雑草「イチビ」の防除方法

(畜試 草地部)

1. 背景とねらい

近年、1年生雑草「イチビ」はサイレージ用とうもろこし圃場での発生が目立って増加しており、サイレージ用とうもろこしの生育抑制・機械作業での障害・「イチビ」の混入したサイレージの嗜好性の悪さ等が問題となってきた。この「イチビ」は従来の除草体系では防除が不可能である。よって「イチビ」に効果的な生育期防除を検討したので参考に供する。

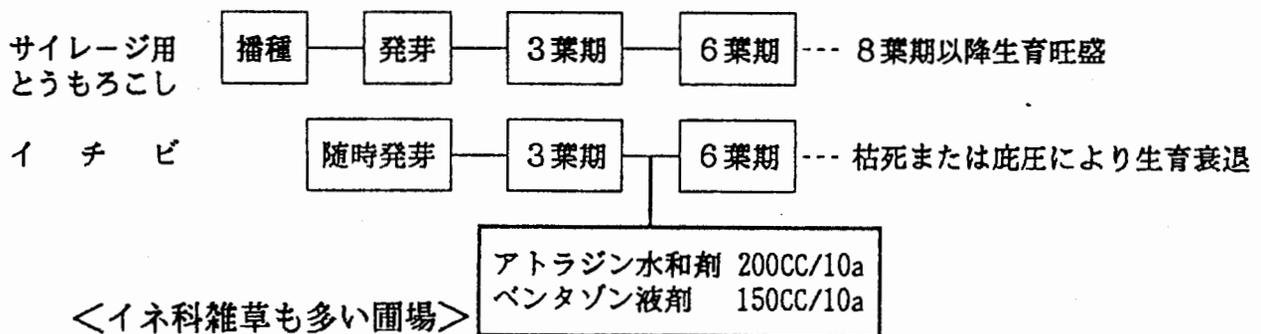
2. 技術の内容

(1) 「イチビ」に対する除草体系

現在、アトラジン水和剤+アラクロール乳剤が慣行法となっているが、農薬登録上アトラジン水和剤を2回散布することはできないので、「イチビ」発生圃場では次のような除草体系を行う。

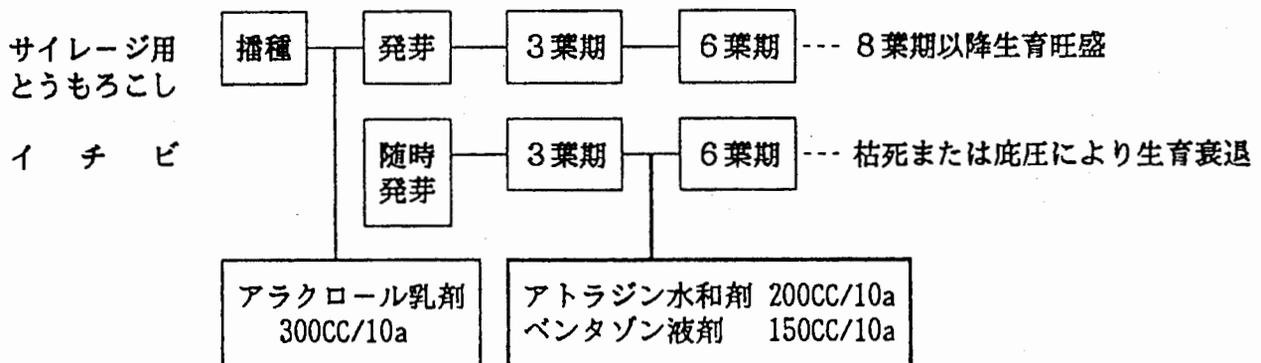
＜「イチビ」主体でイネ科雑草の少ない圃場＞

生育期一発処理体系



＜イネ科雑草も多い圃場＞

土壌処理+生育期処理体系



(2) 除草剤による殺草効果

アトラジン水和剤の単用では「イチビ」の殺草効果が劣り、大半が葉の変色・枯死の程度に留まった。また、殺草効果が現れるまでには長い期間を必要とした。2回掛けをすると枯死率は高まったが、農薬登録上・機械作業上問題があった。

ベンタゾン液剤の単用では、除草剤散布時に生存する「イチビ」をほぼ枯死させ殺草効果は十分であったが、抑制期間が短くすぐに新たな発芽がみられ問題があった。これらを混合すると除草剤散布時に生存する「イチビ」を枯死させるほか、その後の「イチビ」の発芽も抑え土壌処理効果も兼ねていることが伺われた。また、単用よりも故殺期間も早まり、「イチビ」以外の雑草にも殺草効果があった。サイレージ用とうもろこしには薬害は見られなかった。

3. 指導上の留意点

- (1) 除草剤の散布は、「イチビ」が随時発芽してくるので生え揃った時期（3～6葉期）をよく見計らい行うこと。
- (2) 「イチビ」の草丈は均一でないので、下繁草までよくかかるように希釈水量を十分（100ℓ/10a以上）用い散布ムラのないように注意する。

4. 試験成績

表 初生初期防除処理結果 6月15日処理（生育初期）

イチビ 生育 ステージ	処 理 区	殺 草 効 果 観 察 *			
		6/22 (7)	6/28 (13)	7/ 2 (17)	7/11 (26)
発 生 初 期 2～4葉	1.対照区	-	-	-	-
	2.アトラジン水和剤1回散布 200CC/10a	2	2～4	2～5	2～5
	3.アトラジン水和剤2回散布 200CC/10a×2回	2	2～4	5	5
	4.ベンタゾン液剤 150CC/10a	2～4	3～5	4～5	
	5.ベンタゾン液剤 300CC/10a	2～4	4～5	4～5	
	6.アトラジン水和剤+ベンタゾン液剤 200CC+150CC/10a	4～5	5	5	5

表 伸長始め期防除処理結果 6月25日処理（伸長始め期）

イチビ 生育 ステージ	処 理 区	殺 草 効 果 観 察 *		
		7/ 2 (7)	7/11 (16)	7/18 (23)
伸 長 始 期 4～6葉	1.ベンタゾン液剤 150CC/10a	2	2～4	4～5
	2.ベンタゾン液剤 200CC/10a	2	2～4	4～5
	3.ベンタゾン液剤 300CC/10a	2	2～4	5
	4.アトラジン水和剤+ベンタゾン液剤 200CC+150CC/10a	2～4	2～4	5
	5.アトラジン・メトクロール水和剤 +ベンタゾン液剤 400CC+150CC/10a	2～4	2～4	5

* 殺草効果観察

- | | |
|---------------|--------------|
| 0 効果無し | 3 茎の一部枯死 |
| 1 茎葉の変色、捻転 | 4 地上部枯死 |
| 2 葉の一部または全部枯死 | 5 地上部を含めた全枯死 |

注) () は除草剤散布後日数